

共同の論調 厳し過ぎる

読者センターに「温かみのある」報道求める声

加計報道問題の追及に会社はどう答えたか 上 2018年6月5日生協

組合は、新聞労連と共同で2月8日、元文部科学事務次官の前川喜平さんを招いて「前川喜平さんと考えるメディアのあり方 これでもいいの？山陽新聞」フォーラムを、岡山市勤労者福祉センターで開きます。フォーラムでは、組合方針を理由に、正副委員長の出向を拒否するというハラスメントに加えて、加計問題を一貫して小さく扱い、読者・県民に問題点を伝えないという紙面の問題も取り上げます。フォーラムを前に、これまでの団交、生協で、加計報道をめぐる追及に、会社はどう答えているか、シリーズでご紹介します。まず、2018年6月5日の生協からです。

藤井 加計学園の問題が正念場に迎えている。加計の報道については、日下さんが現在も編集を統括されているということだから、お聞きする。報道については、共同通信を頼っているが、本来ならば、加計学園は岡山の学園だから、山陽新聞社として、きちっと自前の報道ができるような体制を組んでほしいというのがある。紙面編集という問題でいうと、なるべく「加計」という言葉は使わない、「獣医学部新設問題」という言葉に置き換えて、「加計」という言葉は使わない、というような決まり事というか、暗黙の了解がある。上からの指示がある。本来1面に行くニュースでも、内政面に掲載するなど、ワンランク下の扱いをしている。今回、安倍首相と面会したか、しなかったかという問題で、首相は面会をしていない、加計学園の加計理事長も面会をしていない、担当の職員が面会していないのに面会したと言っただけなんだというコメントを出している。それが見ても、これは口裏合わせではないのかというように思うのではないか。その真実のところは、きちっと本来ならば、山陽新聞社として取材すべきなのではないか。

自制的な報道ではない

日下 編集担当として当然、責任を感じている。ただ、自前の報道も折々にはしている。今治の住民説明会などには記者を派遣しているというように聞いている。言われるほど、そんなに自制的な報道ではないと思っている。安倍首相がかかわる官邸の問題なので、自前の報道もしていかなければならないというのはよく分かる。共同通信に加盟しているわけだから、共同の配信記事を淡々と使っているという感じを受けている。

新聞社本来の役割とは違う

藤井 加計学園、岡山理科大学の先生は優秀だし、生徒も優秀だし、そういった人たちに影響があるというのは分かる。一定の配慮が必要だということは理解している。ただ、あまり配慮し過ぎて、事は安倍政権の問題だから、森友決済文書の改ざんであったり、自衛隊イラク派兵の日報の隠ぺいであったり、あるいは裁量労働制のデータのねつ造であったり、底なしのように不祥事がどんどん、どんどん出てきている安倍政権。これをかえって擁護することになりはしないか。あまりに学生や先生に配慮するあまり、いまの報道は安倍政権擁護の方に働きはしないか。それは新聞社本来の役割とは違うんじゃないか。批判すべきは、きちっと批判することが必要だ。加計が嘘を言っているのであれば、それを暴いていくのが新聞社の務めだ。岡崎編集局長とも話をして、もう少し踏み込んだ報道をしてほしい。

日下 是々非々の立場で報道しなければならないと承知している。擁護するつもりは、全くない。ただ、読者センターには、共同通信の論調があまりにも厳し過ぎるのではないかという声の方が若干多いのかなあと感じている。日々読者センターからレポートをいただいております、それを読ませてもらうと、地元紙として、もう少し加計学園に対して、OBも多いのだから温かみのある報道したらどうかという声が多いというのは、書記長の耳にも入っていると思う。そういう視点もあるというのはご理解いただきたい。こちらが筆を緩めているとは思っていない。

藤井 厳しく書いてほしい。筆を緩めずに書いてほしいということをお願いしたい。

2019年1月16日

山陽新聞労働組合ニュース
e-mail: sanyoshimbunroso@yahoo.co.jp